

ASE を体験した小学生の言語的サッカーコミュニケーションに関する研究

池上 雄星 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード：ASE, 小学生, 言語的コミュニケーション

1. 序論

チームスポーツは、協力して、競い合う競技であるため、コミュニケーションは非常に重要な要素である。そのコミュニケーションを促進させるものとして、ASEがある。ASEとは、課題をグループで解決していく過程を通じてコミュニケーションなどを促進していくことを目的に行う(一村, 2007)。結果として、チームの雰囲気向上し、言語的コミュニケーション(以下 VC)が向上したと報告されている。筆者はその VC に着目し、ASE がサッカー中の VC に効果があるのではないかと考えた。霧生(2005)はサッカー中の VC として、①指示・要求、②情報、③修正・確認、④賞賛、⑤励まし、⑥呼びかけ・応答に分類している。そこで本研究は、ASE を体験した小学生の言語的サッカーコミュニケーションについて、霧生の分類を用いてアプローチした。

2. 研究方法

【対象者】L サッカーチームの 5.6 年生 6 名を対象とした。【ASE 内容】フラフープリレー、バルントロリー、ホールインワン、魔法のじゅうたんなど、仲間と協力して解決する活動を行った。【調査方法】2015 年 11 月 11 日に 15 分ハーフのゲームで事前調査を行った。12 月 2 日に ASE 活動を行い、その後のゲームで事後の調査を行った。データ収集は、VC の自己評価として、霧生(2005)のアンケートを参考に作成したアンケートを用いた。さらに、実際の試合中の発言を収集するために各選手に IC レコーダーを付けてもらった。また内容と状況を理解するために、試合中に選手を観察し、記録する人を各選手に 1 名ずつつけた。

3. 結果と考察

1) VC の自己評価

ASE 前後において、VC の自己評価の差を明らかにするために、全体と項目ごとで Wilcoxon の符号付順位検定を行った結果、有意な差はなかった($z=0.530$, n.s.)。しかし、修正と呼びかけ(個人)の項目得点は向上した。

2) 発言の分析

サッカー中の実際の発言については、発言数は増加し(253→277)、個人の名前の使用が増え、発言内容も複数の要素が含まれた言葉になり、指示や要求の増加といった内容の変化が見られた。さらに、選手間の仲が良くなったことから、コミュニケーションの円滑化がみられた。また、課題に取り組む際、目隠しをしているプログラムで名前を呼びながら仲間の位置を確認していたことや、選手同士で積極的に意見を出し合い課題に取り組んでいたことが関係していると考えられる。

4. まとめ

本研究の結果から、サッカー中の VC に有意な向上はみられなかったが、選手同士の仲が深まったことから、より効果的なコミュニケーションを行う土台が築かれたと思われる。今後は、サッカー中の VC の向上のために、小学生の VC スキル向上に焦点をあてた ASE の指導方法やプログラムについて検討する必要がある。

引用文献

1) 一村小百合(2007)グループ活動とグループワークの役割について:ASE プログラム実施を通して考える。関西福祉科学大学紀要, 11:149-161。

2) 霧生尚央(2005)中学生サッカー選手の競技中における言語的コミュニケーション。早稲田大学人間科学研究, 修士論文要旨, Vol.18。

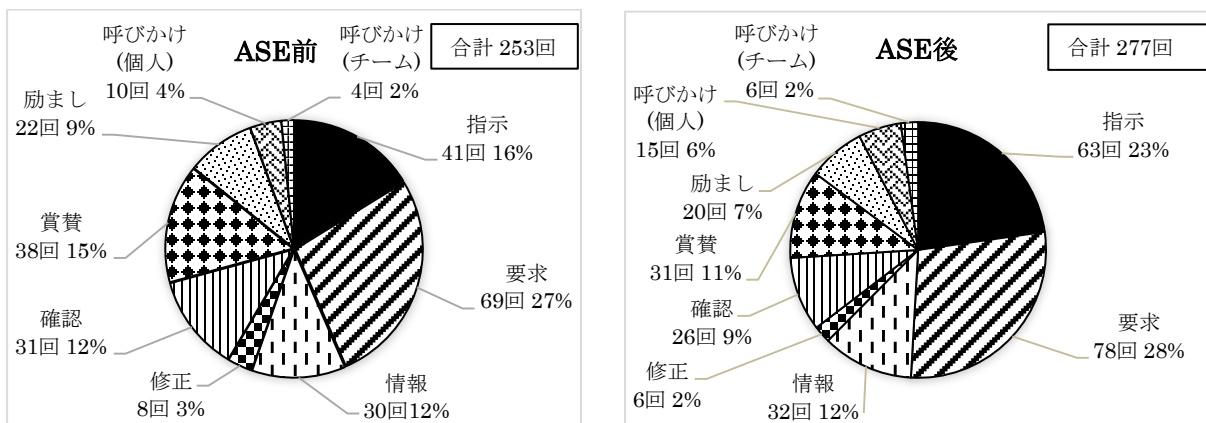


図 1 : ASE 前後における小学生の言語的コミュニケーションの変容